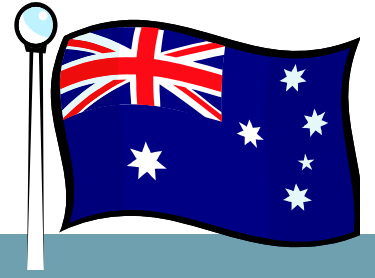


オセアニア[豪州]



1. 農・畜産業の概況

豪州の農業(林業、水産業を除く)は、GDPで全体の約2.2%、就業人口で全体の約3.3%(林業、水産業を含む)と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない(2009/10年度)。しかし、同年度における全商業輸出額に占める農産物の割合は14.1%と鉱物資源(68.1%)に次いで高く、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積(約7億7千万ヘクタール)の53%に相当する約4億1千万ヘクタールが農業可能地である

が、そのうち94%は牛や羊の放牧に利用可能な自然草地および採草地であり、穀物や野菜などが栽培される耕地面積は、約2,460万ヘクタールにすぎない(2009年6月末現在)。豪州の農場数は、多少の増減があるものの2004/05年度まで減少傾向で推移している。2005/06年度には大きく増加に転じたものの、その後は再び減少し、2008/09年度は、13万6千戸となっている。

表1 農場数などの推移

(単位:戸、千人、豪ドル)

区分/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10
農場数	154,472	150,403	140,704	135,996	-
農業従事者	348.1	350.4	352.5	357.6	369.2
1農場当りの農業粗所得	70,182	29,800	64,220	78,980	58,900

資料:ABARES「Australian Commodity Statistics 2010」、「Australian Farm Survey Results」

注1:各年6月末時点

注2:農場施設評価額22,500豪ドル以上の農場

注3:2009/10年度は概算値

一方、経営面では、肉牛、羊、酪農などの専業経営のみならず穀物などとの兼業も多いことから、農業従事者全体の約8割が何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

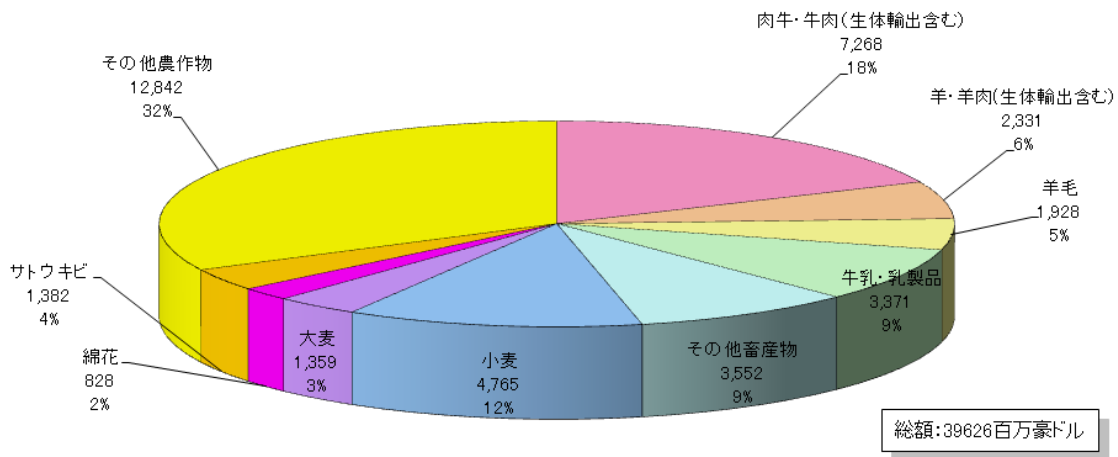
近年、増加傾向にあった農業粗生産額は、2002/03年度および2006/07年度の干ばつの際、大きな落ち込みをみせた。2007/08年度も干ばつ状況はみられたものの、穀物生産が回復をみせたことに加え、好調な穀物相場から、同年度の農業粗生産額は前年度比19.3%増と大幅

に増加した。2008/09年度、2009/10年度は再び減少が続き、2009/10年度は同5.9%減の約396億2千万豪ドルとなった。

内訳を見ると、畜産物が同4.3%減の184億5千万豪ドル、穀物など畜産物以外の農作物が同7.2%減の211億

8千万豪ドルと、畜産物および農作物ともに前年度と比べて下回った。また、畜産物粗生産額のうち、肉牛・牛肉（生体輸出を含む）は72億7千万豪ドル（同5.4%減）、牛乳・乳製品は33億7千万豪ドル（同15.5%減）となった。

図1 農業粗生産額(2009/10年度)



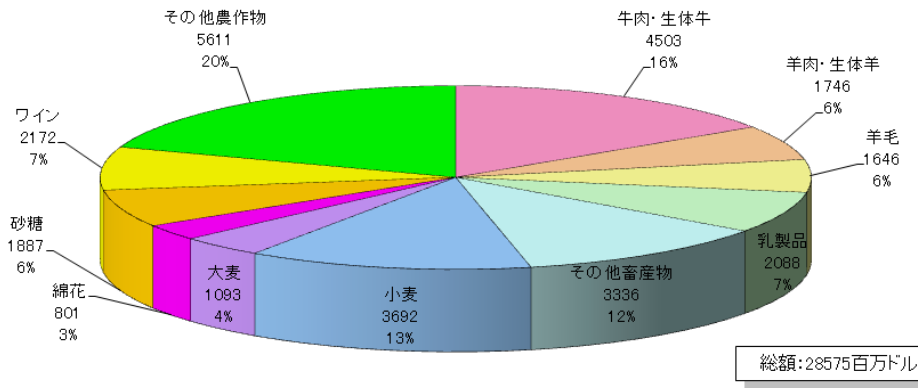
資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 11.2」

2009/10年度の農産物総輸出額(FOB)についても、前年度比10.9%減の約285億8千万豪ドルと、大きく減少した。

このうち、畜産物輸出額は、同11.9%減の約133億2千万豪ドルとなった。内訳は、牛肉・生体牛が45億豪ドル（同16.9%減）、羊肉・生体羊が約17億8千万豪ドル（同

1.7%増）、羊毛が23億1千万豪ドル（同0.7%減）、牛乳・乳製品が20億9千万豪ドル（同22.1%減）と、概ね減少となった。なお、農産物総輸出額に占める畜産物輸出額の割合は全体の46.6%と、過半数を下回っている。

図2 農産物総輸出額(2009/10年度)



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 11.2」

2. 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営が大部分であり、気象条件に恵まれ、牧草の生育に有利なビクトリア州を中心に行われてきた。しかし、近年では、そういった地域においても、度重なる干ばつを経て、穀物や乾草などの購入飼料の利用が必須となっている。

生産される生乳の約7割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の約7割が輸出向けという輸出依存型産業である。

従って、生乳生産量は気象条件や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴を有している。

① 主要な政策

豪州では、かつて、加工原料乳に対する価格補てん政策(連邦制度)と飲用向け生乳に対する最低価格保証政策(各州の制度)を実施していたが、2000年7月1日に両制度がともに撤廃となり、生乳の販売・流通は完全に自由化された。また、2003年7月には酪農団体の再編が行われ、豪州酪農庁(ADC)とほかの研究機関が統合し新たにデイリー・オーストラリア(DA)が発足し、販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

なお、これらの事業財源の多くは、生乳の販売時に課される生産者課徴金(強制徴収)によるものである。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、ピークであった2001年の218万頭から、2007年、2008年の度重なる干ばつを経て、

減少傾向で推移してきた。2010年6月末の乳用経産牛飼養頭数は、干ばつ発生前の2006年6月時点と比べ14.9%減の160万頭となった。また、同時点の酪農家戸

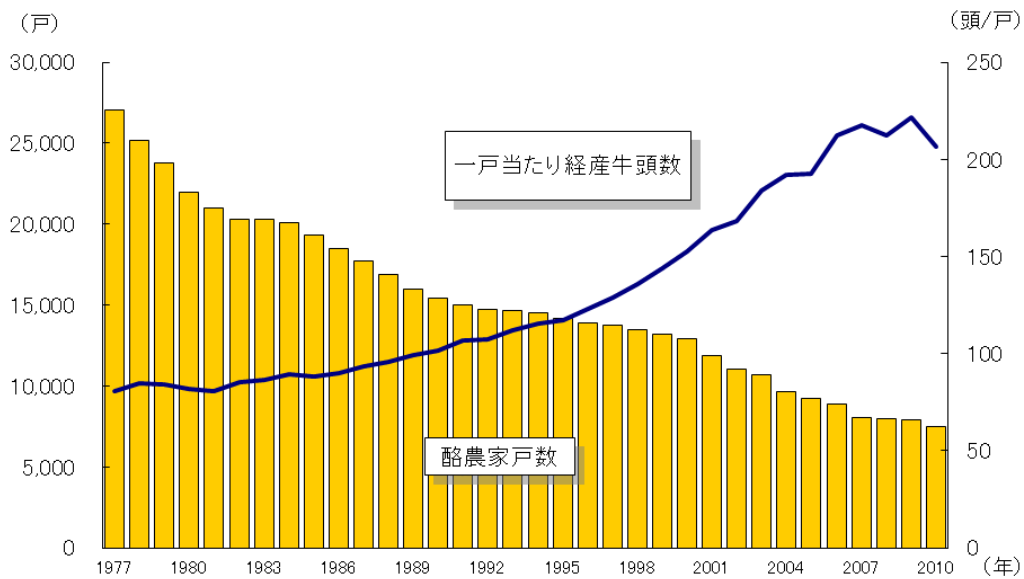
数も、同15.1%減の7,511戸となった。一方、1戸当たりの経産牛飼養頭数は規模拡大が進み、近年200頭を超えている。

表2 乳牛飼養頭数等の推移

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
乳牛飼養頭数(千頭)	2,788	2,663	2,537	2,612	2,482
経産牛飼養頭数(千頭)	1,880	1,786	1,641	1,676	1,600
酪農家戸数(戸)	8,844	8,055	7,953	7,924	7,511
1戸当たり経産牛頭数(頭)	213	222	206	212	213

資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2010」
注: 各年6月末時点

図3 酪農家戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年から2000年代初頭まではガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待を背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度(7~6月)以降は、干ばつなどの影響により

減少傾向で推移し、2009/10年度は、902万3千キロリットルと、前年度から3.9%減少した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧に適した品種へと改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較

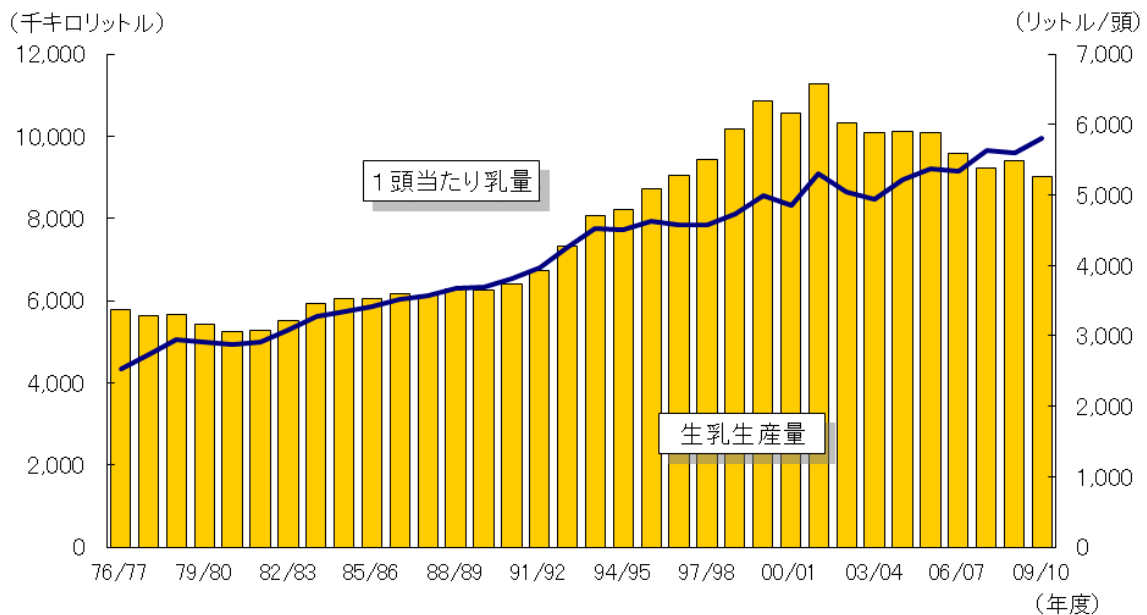
してそれほど多くない。しかし、近年は、遺伝的改良や飼養管理技術の向上などにより着実に増加し、2009/10年度は、過去最高の5,810リットルとなった。

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇する傾向にあり、2004/05年度には生乳生産量の80%程度を占めた。しかし、近年は生乳減産が続いていることや国内の飲用乳需要が堅調であることなどから低下しており、2009/10年度の加工向けシェアは、74.9%となった。

生乳生産量を州別に見ると、ビクトリア(VIC)州が全体の64.2%を占めて他州を大きく引き離しており、豪州最大の酪農地域であることを示している。一方、飲用乳の処理量は、シドニーなど大消費地を擁するニューサウスウェールズ(NSW)州が最も多く、続いてVIC州、クイーンズランド(QLD)州となっている。

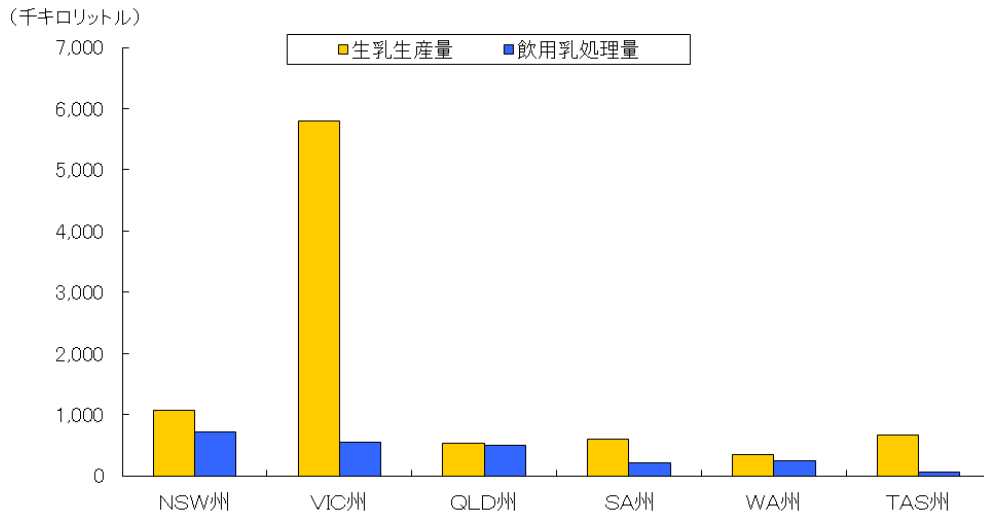
このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとの生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2010」

図5 州別生乳生産量(2009/10年度)



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus 2010」

③ 牛乳・乳製品の需給動向

主要乳製品の生産量は、国際的な乳製品需要の拡大を反映して増加傾向にあったが、干ばつ(2002/03年度)の影響により減少に転じた以降、多少の変動はあるものの減少

傾向で推移している。2009/10年度の生産量は、生乳生産量が減少したこともあり、チーズを除く主要品目で前年度を下回った。品目別に見るとバター(バターオイルを含む)が前年度比13.6%減の12万8千トン、脱脂粉乳が同10.3%減の19万トン、全粉乳が同14.6%減の12万6千トンとなった。一方、チーズは同2.1%増の34万9千トンと増加した。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

(単位: 千キロリットル、千トン)

区分/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10
生乳	10,089	9,583	9,223	9,388	9,023
飲用向け	2,061	2,156	2,188	2,229	2,269
加工向け	8,028	7,427	7,035	7,159	6,754
バター	92.9	101.7	99.2	109.8	100.1
バターオイル	52.9	31.4	28.4	38.7	28.2
チーズ	372.8	363.6	360.9	342.3	349.4
脱脂粉乳	205.5	191.5	164.3	212.0	190.2
全粉乳	158.3	135.4	142.0	147.5	126.0

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注：脱脂粉乳にはバターミルクパウダーを含む。

2009/10年度の主要乳製品の輸出量は、乳製品の減産により減少した。ただし、チーズについては生産量の増加から、前年度比16.2%増の16万8千トンとなった。

2009/10年度の乳製品生産量に占める輸出割合は、全粉乳が92.7%、脱脂粉乳が66.2%と生産量の過半を占めている。また、バター（バターオイルを含む）が57.4%、チーズが48.1%と、ともに輸出指向性が高いことが読み取れる。

乳製品の輸出先は、日本、東南アジアを含めたアジア地域向けの割合が高く、輸出額ベースで全体の72.4%と、圧倒的なシェアを占めた。特に粉乳類は、還元乳などの需要が多い東南アジア諸国向けを中心に、脱脂粉乳、全粉乳ともに輸出量全体の7~8割がアジア地域向けに輸出されている。

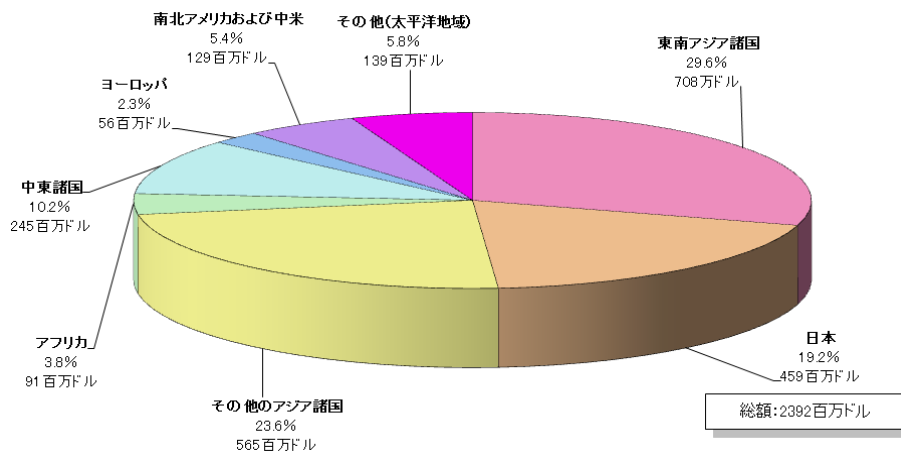
表4 主要乳製品輸出量の推移

(単位:千トン)

区分/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	輸出割合 (2009/10)
バター	35.5	44.3	34.6	44.0	41.7	} 57.4%
バターオイル	46.8	36.7	22.5	26.5	32.0	
チーズ	201.7	212.3	202.4	144.7	168.2	48.2%
脱脂粉乳	175.6	160.3	119.8	162.1	125.9	66.2%
全粉乳	164.8	143.4	125.1	158.0	116.9	92.7%
飲用乳	70.1	69.2	59.9	60.0	64.5	2.8%

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

図6 地域別乳製品輸出額(2009/10年度)



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus 2010」

飲用乳の1人当たり消費量は、カフェ文化の浸透などに伴い牛乳の間接消費が増えた結果、増加傾向にあり、2009/10年度は102リットルとなった。また、近年の健康

志向を反映し、売り場面積が拡大しているヨーグルトは、7キログラム台に達し、チーズについても、前年度同様、12.9キログラムとなった。

表5 1人当たり乳製品消費量の推移

(単位:kg)

区分/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10
飲用乳	100.2	103.4	103.0	102.6	102.4
チーズ	11.7	12.0	12.5	12.9	12.9
バター	3.9	3.8	4.1	4.0	3.8
ヨーグルト	7.0	7.1	6.9	6.7	7.1

資料:Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

④ 乳価の動向

生産者乳価は、2004/05年度から2006/07年度は、1リットル当たり30豪セント前半で推移していた。しかし、2007/08年度は、国際的な乳製品価格の高騰を反映して、

同49.6豪セントと過去最高となった。しかしながら、2009/10年度は、世界金融危機(2008年9月)以降の経済低迷、比較的高値で推移した豪ドルの影響から、前年度比12.0%安の37.3豪セントと2年連続で低下した。

表6 1人当たり乳製品消費量の推移

(単位:豪セント/リットル)

年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10
生産者乳価	33.1	33.2	49.6	42.4	37.3

資料:Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

(2) 肉牛・牛肉産業

豪州の肉牛生産は、酪農生産と同様、牧草(放牧)に依存した構造となっており、また、牛肉生産量の6割以上を輸出に向けた輸出依存型産業となっている。

肉牛は、乳牛に比べると粗放的な飼養管理が可能であり、また、利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地域などの自然条件が厳しいところでも、これに適応する品種を選択的に導入することによって飼養が可能となることから、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土でさまざまな品種による生産が行われている。

① 主要な政策

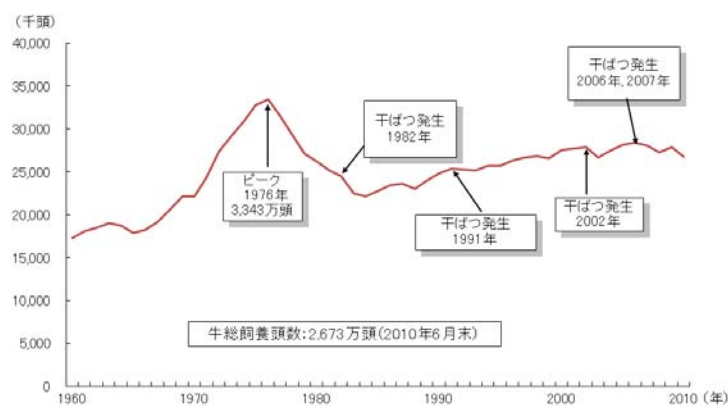
肉牛や牛肉の需給を管理する制度・政策は特になく、生産者は国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州家畜検疫検査局(AQIS)などの政府機

関が防疫政策を、豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引(販売)時に課される生産者課徴金(強制徴収)によるものである。

② 牛の飼養動向

豪州における牛飼養頭数(乳牛を含む)の推移を中・長期的に見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急速に増加し、76年には過去最高の3,343万頭を記録した。その後、第二次オイルショック(79年)などによる世界的な牛肉需要の減退や肉牛経営の悪化、大干ばつの発生(82年)などによりと畜頭数が急増し、84年には2,216万頭と、ピーク時である76年の飼養頭数に比べ約3分の2まで減少したが、それ以降は緩やかな増加に転じた。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2010」

2000年以降は、全体として2,700～2,800万頭台でほぼ安定的に推移しているが、干ばつの影響などによる増減がみられている。

2002/03年度の干ばつの影響で、2003年には2,600万頭台まで落ち込んだものの、2005年には2800万頭台ま

で回復した。しかしながら、2006/07年度の大干ばつにより、2006年以降は減少傾向にあり、2010年の総飼養頭数は2,673万頭(前年比4.2%減)となった。

表7 牛飼養頭数の推移

(単位:千頭)

区分/年	2006	2007	2008	2009	2010
肉用牛	25,605	25,373	24,784	25,294	24,251
乳用牛	2,788	2,663	2,537	2,612	2,482
合計	28,393	28,037	27,321	27,906	26,733

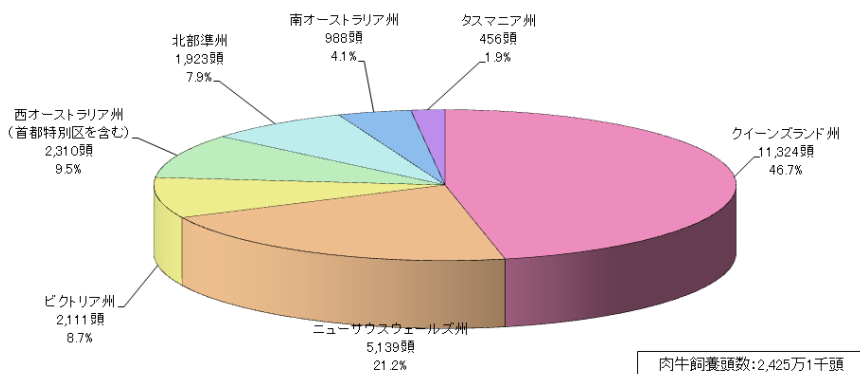
資料: ABARES「Australian Commodity Statistics 2010」

注: 各年6月末時点

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、クィーンズランド州(シェア46.7%)、ニューサウスウェールズ州(同21.2%)、ビクトリア州(同8.7%)の東部3州で全体の8割近くを占

めている。近年は、インドネシア向け生体牛輸出の拡大を背景に、クィーンズランド州北部や北部準州(同7.9%)で著しい伸びがみられた。

図8 地域別乳製品輸出額(2009/10年度)



資料: ABARES「Australian Commodity Statistics 2010」

③ 牛肉の需給動向

100年に一度といわれる干ばつに見舞われた2006/07年度の牛と畜頭数(子牛を含む)は908万頭となったものの、2007/08年度以降は減少に転じ、2009/10年度の牛と畜頭数は前年度比2.5%減の843万頭となった。枝肉生

産量についても、と畜頭数の減少により前年度比0.7%減の213万トンとわずかに減少した。

牛肉の輸出量は、近年90~97万トンの間で推移しているが、2009/10年度は、主要3カ国のうち日本および米国における輸出量が減少したことから、総輸出量は前年度比7.1%減の90万トン(船積み重量ベース)となった。

表8 牛肉需給の推移

区分/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10
と畜頭数(千頭)	8,401	9,081	8,799	8,703	8,483
生産量(千トン:枝肉重量)	2,077	2,226	2,155	2,148	2,132
輸出量(千トン:船積み重量)	892	974	930	968	899
1人当たり消費量(kg)	35.8	36.3	35.6	32.5	35.7

資料:MLA「Statistical Review」

注:と畜頭数は6月末時点、子牛を含む。生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉を含む。

2009/10年度の国別輸出量(船積み重量ベース)は、最大の輸出先である日本向けが前年度比3.5%減の35万トン(シェア38.9%)、米国向けが同25.4%減の21万トン(シ

ェア23.4%)、韓国向けは、同9.7%増の12万トン(シェア13.8%)となった。

表9 牛肉の国別輸出量の推移(船積み重量ベース)

(単位:千トン)

国名/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	輸出シェア (09/10)
日本	388	403	365	363	350	38.9%
米国	296	303	240	282	211	23.4%
韓国	121	157	146	113	124	13.8%
その他	87	111	179	210	215	23.9%
合計	892	974	930	968	899	

資料:MLA「Statistical Review」

生体牛の輸出については、90年代中頃からインドネシア、フィリピンなど東南アジア諸国向けの肥育素牛を中心に急増した。生体牛の輸出は、97年のアジア経済危機の影響により一時的に減少したものの、その後の順調な経済復興や中東諸国など新規市場の開拓もあって、再び増

加基調に転じ、2002/03年度には、100万頭を超え史上最高となった。その後、減少傾向に転じたものの、2005/06年度以降は増加を続け、2009/10年度は、前年度比7.5%増の96万頭となった。

表10 生体牛の国別輸出量の推移

(単位:千頭)

国名/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10	輸出シェア (09/10)
インドネシア	358.3	452.2	547.2	701.4	718.1	75.0%
中国	14.3	12.0	6.8	16.0	53.3	5.6%
イスラエル	43.5	54.4	59.0	27.7	36.4	3.8%
エジプト	-	-	-	-	33.4	3.5%
日本	24.1	21.5	20.2	17.5	15.8	1.7%
フィリピン	17.0	14.0	15.6	10.7	14.8	1.5%
サウジアラビア	24.4	26.2	14.8	24.9	7.7	0.8%
マレーシア	44.9	52.2	26.9	23.4	5.5	0.6%
その他	86.8	91.8	132.5	93.4	72.6	7.6%
合計	577.7	675.8	769.9	891.1	957.5	

資料:MLA「Statistical Review」

1人当たりの食肉消費量は110キログラム前後で推移している。2009/10年度については、牛肉およびラム肉の低迷により大きく消費量が減少した前年度と比較すると、概ね、増加に転じた。健康志向や低価格を反映して鶏肉

(38.0キログラム)の消費が最も多く、次いで牛肉(35.7キログラム)、豚肉(26.0キログラム)、羊肉(12.2キログラム)の順となっている。

表 11 1人当たり食肉消費量の推移

(単位:kg)

区分/年度	2005/06	2006/07	2007/08	2008/09	2009/10
牛肉	35.8	36.3	35.6	32.5	35.7
マトン	2.8	3.2	2.7	2.1	1.7
ラム	10.2	11.2	11.4	11.0	10.5
豚肉	22.8	25.4	24.7	24.3	26.0
鶏肉	38.5	39.1	37.8	37.5	38.0
合計	110.1	115.2	112.2	107.4	111.9

資料: MLA 「Statistical Review」

注: 牛肉には子牛肉を含む。

④ 肉牛価格の動向

2005年の肉牛価格は、干ばつ(2002/03年度)の影響が緩和してきたことから肉牛生産者の出荷抑制傾向が見られた中で、豪州産牛肉に対する需要は引き続き旺盛で

あったことから、2001年9月以来の最高水準に達した。しかし、その後は減少傾向で推移している。2009年は、主要輸出市場における豪ドル高による需要の低迷を受けて、前年からさらに低下し、肥育牛は1キログラム当たり299豪セント(前年比6.3%減)となった。

表 12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

(単位:豪セント/kg)

区分/年	2005	2006	2007	2008	2009
若齢牛(枝肉重量200kg以下)	368	341	324	333	320
肥育牛(同320kg~400kg)	329	324	312	319	299
経産牛(同200kg~240kg)	285	268	254	268	253

資料: ABARES 「Australian Commodity Statistics 2010」